

コロナ禍 初産不安

新型コロナウイルス禍で出産・育児に関する情報が得にくくなり、不安を感じている初産婦が増加している。との調査結果を、岡山大の研究グループがまとめた。医療機関による母親学級中止などが影響しているとみられる。研究を主導した同大学院保健学研究科の中塚幹也教授(生殖医療)は「出産・育児に悪影響を及ぼす恐れがあり、困難を感じている人への支援が必要だ」としている。(石井聡)

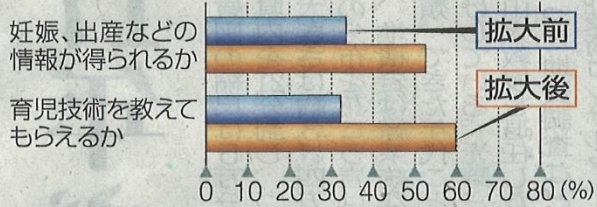
岡山大グループ調査

調査は6〜8月、岡山、福山市の2医療機関の協力で実施した。妊婦433人に、コロナの影響に関する38項目を質問。17〜45歳の初産婦189人から有効回答を得た。

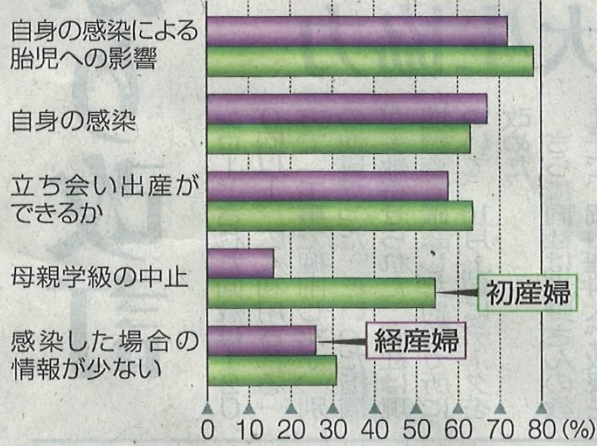
初産婦に「不安に感じること」(複数回答)をコロナ拡大前と拡大後で尋ねたところ、拡大後は52・6%が「妊娠、出産、子育ての情報取得」を選び、拡大前の33・6%から1・5倍に増加。「育児技術の習得」は拡大後は59・7%が不安に感じ、拡大前の32・2%から1・8倍に上昇した。

「3密(密閉、密集、密接)を避けるため、育児について学ぶ『母親学級』が中止になっているほか、情報交換する『ママ友』をつくる機会が減っていることが要因ではないか」と中塚

コロナの拡大前後で初産婦が感じている不安



コロナで経産婦、初産婦が感じている不安



母親学級が中止影響が情報入手困難に

経済的な不安については、感染拡大後は「ある」「ややある」とした妊婦は合わせて50・8%となり、拡大前から13・5%も増えた。拡大後に経済的な不安が生じた妊婦を対象に、うつなどの精神状態を調べた結果、5・3%が特に重い「重度」、19・7%が次に重い「中等度」となった。

中塚教授は「コロナ禍で妊婦の負担が増大している現状が浮き彫りになった。支援もなく精神状態が悪化してしまつと、『妊娠さえしなかったら』との思考に陥り、ネグレクト(育児放棄)や虐待につながりかねない」と警鐘を鳴らしている。

調査は6〜8月、岡山、福山市の2医療機関の協力で実施した。妊婦433人に、コロナの影響に関する38項目を質問。17〜45歳の初産婦189人から有効回答を得た。

教授は指摘する。「コロナの感染拡大で新たに不安に感じていること」(複数回答)を経産婦と初産婦に質問。両方合わせ、「自身が感染して胎児に影響がないか」75・3%▽「自身の感染」65・0%▽「立ち会い出産ができるか」60・8%などと続いた。